The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	失われた「黄金時代」を求めて : ライネロヴァー『あるプラハ人の夢のカフェ』における言語選択
Author(s)	島田, 淳子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2012, 46, p. 77-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27221
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

失われた「黄金時代」を求めて

── ライネロヴァー『あるプラハ人の夢のカフェ』における言語選択 ──

島　田　淳　子

キーワード：プラハのドイツ語文学，多言語，亡命作家

複数の言語を自由に操る作家の作品を読み解く際、その作家が作品を何語で執筆し、何語で発表したかという問題は非常に重要である。作家の社会的立場は執筆言語の選択によって左右されるし、作品をダイレクトに受け取る読者層も変化する。また、言語選択には多くの場合それぞれの言語に対する作家個人の意識や感情も反映されている。

チェコ共和国の首都プラハは、今日でこそチェコ語による単一言語都市だが、多言語都市としての歴史が長い。現在のチェコ共和国に当たるボヘミア王国はヨーロッパのほぼ中心に位置するという地理的条件のため古くから交通の要衝として栄え、中世にはすでにドイツ系住民が定住していた。1620年の白山の戦いの後、ハプスブルク帝国の支配を受けるようになったボヘミアでは、文化の担い手はチェコ人からドイツ人へと移行し、チェコ語文化は大きく衰退する。チェコの民族アイデンティティの再獲得は、農民語となったチェコ語を近代社会にふさわしい言語として再建することから始まった。固有の言語文化の自覚はやがて政治的自立の要求へと拡張され、1919年にはハプスブルク帝国の支配を脱してチェコスロヴァキア共和国（第一共和国）の樹立に至る。マサリク Tomáš Garrigue Masarykを大統領とする第一共和国時代は、チェコ系住民、ドイツ系住民、そしてユダヤ系住民が、対立や衝突を繰り返しながらも豊かな文化を生み出していった「黄金時代」でもあった。しかしながら、こうした多民

族・多言語都市としての性格は、第二次世界大戦によって多くのユダヤ系住民が虐殺され、戦後、ドイツ系住民が国外に追放されたために、現在では完全に失われてしまった。

レンカ・ライネロヴァーは、プラハが多言語都市から単一言語都市へと変容していく時代に執筆活動をつづけた作家である。第一共和国期、ドイツ語とチェコ語のバイリンガルとして育った彼女は、当初はチェコ語による創作も行っていたが、最終的にはドイツ語を執筆言語として選びとった。戦後のチェコスロヴァキアにはドイツ語話者がほとんどいなくなっていたために、ライネロヴァーの作品は国内での出版に際して、翻訳者によってチェコ語に翻訳され、さらに作者自身のチェックを受けるという、いささか回りくどい手順を踏むことになった。[1)]

本稿で扱う『あるプラハ人の夢のカフェ』*Das Traumcafé einer Pragerin*（1996）は、ライネロヴァーの分身である「わたし」が、プラハ上空に「夢のカフェ」という虚構空間を作り出し、カフカやキッシュ、ハシェクなどプラハゆかりの芸術家や知識人と談話を楽しむというものである。語り手は「夢のカフェ」に集う芸術家たちと思い出話をしながら、第一共和国時代から現代にかけてプラハで活躍した彼らを具体的なエピソードを通して読者に紹介していく。同時に「夢のカフェ」の芸術家たちにその死後にプラハで起こった出来事について伝えることで、戦後のプラハの歩みを改めて振り返り、語りなおす。そこには、彼女が青春を過ごした第一共和国時代に対するノスタルジーが強くあらわれている一方で、ビロード革命後のプラハの状況が皮肉を込めて描かれている。

以下ではまず先行研究を参考にライネロヴァーの略歴を紹介し、[2)] インタビュー等を通して彼女の両言語に対する意識を確認する。その上で『あるプラハ人の夢のカフェ』を、とりわけ「夢のカフェ」という作品舞台に着目して分析し、ライネロヴァーがかつてのプラハ文化をどのようにとらえ

ており、それが彼女の言語選択とどのような関係にあったのかを考える。

1　ライネロヴァーという女性作家

レンカ・ライネロヴァーは、1916年、ユダヤ系チェコ語話者の父とユダヤ系ドイツ語話者の母の間に生まれ、チェコ語とドイツ語のバイリンガルとして育った。父親が商売に失敗したために15歳でギムナジウムを中退して仕事に就いた彼女は、勤め先の同僚が組織していた亡命ドイツ人の子供たちの演劇グループを指導したことをきっかけに文学創作に興味をもつようになる。その後、亡命ドイツ人の新聞『労働者画報』*AIZ:Arbeiter-Illustrations-Zeitung*のジャーナリストとして働き始め、編集者のヴァイスコップF.C.Weiskopfや作家キッシュ Egon Erwin Kischと知り合う。

プラハがナチス・ドイツによって侵略された1939年3月、ルーマニアに出張していたライネロヴァーはそのままパリへ亡命する。パリではチェコスロヴァキアから亡命してきたほかの芸術家たちとともに、ホフマイステル Adolf Hoffmeister が開いた「チェコスロヴァキア文化の家」で生活していたが、この団体はフランス当局に摘発され、ライネロヴァーはフランスの女性刑務所に収容される。すでにヨーロッパを離れていたキッシュやヴァイスコップ、および彼らの活動を支援していたアメリカの作家たちの尽力で、彼女は当時数少ないユダヤ系移民の受け入れ国であったメキシコに亡命するチャンスを得る。中継地のモロッコで強制収容所に収容されるも脱走し、プラハを去って2年後、ようやくメキシコに到着する。メキシコではキッシュ夫妻の元に身を寄せ、ユーゴスラヴィア人のテオドール・バルク Theodor Balkと結婚した。また、チェコスロヴァキア亡命政府大使館で職を得、雑誌の発行を手掛けた。

終戦後数週間してライネロヴァーは夫とともにベオグラードへ赴き、そ

こで娘を出産し、1948年、共産党による一党独裁が始まったプラハへ帰郷する。しかしながら、故郷に残っていたライネロヴァーの家族は全員ナチス・ドイツによって殺されていた。同年12月に癌の手術を受けた彼女は、回復後チェコスロヴァキア放送の海外放送部門で働き始めたが、1952年、秘密警察に逮捕され15ヶ月間取調室に収容された。釈放後、プラハを追放された家族が移り住んでいたパルドゥビツェ Pardubiceの窯業会社で3年間勤務した。その後、プラハに戻った彼女は1950年代末からオルビス社OrbisVerlagでドイツ語読者向けの雑誌『ヨーロッパの中心で』*Im Herzen Europas*の編集長を務めた。1964年には名誉を回復されたが、1968年、「プラハの春」への軍事介入（チェコ事件）後再び発禁処分を受けた。ライネロヴァーは1983年から東ベルリンのアウフバウ社Aufbau Verlagを通してドイツ語で作品を出版し始めた。ビロード革命後の1991年にはチェコ国内でも出版が許されるようになり、ドイツでは1999年にシラー指輪賞、2003年にゲーテ・メダルを受賞し、チェコでは2001年にヴァーツラフ・ハヴェルVáclav Havelから功労メダルを受け、2002年にプラハ名誉市民となった。その後も著作活動を続ける傍ら、プラハのドイツ語文学を保護することを目的とした、プラハ・ドイツ語作家文学館Prager Literaturhaus deutschsprachiger Autoren / Pražský literární dům autorů německého jazyka を創設するなど活発な活動を続け、2008年6月、92歳でこの世を去った。

2　チェコ語とドイツ語のはざまで

ライネロヴァーは多くのインタビューで一貫して自分の母語Muttersprachеはドイツ語であると明言しており、それに対してチェコ語は「父語」Vatersprachеだと述べている。[3] ライネロヴァーにとって、母親の言葉＝ドイツ語は、父親の言葉＝チェコ語よりも近しい存在であった。[4]

しかしながら、実際に彼女の作品のドイツ語版とチェコ語版を比較してみると、ドイツ語で書くことはライネロヴァーにとってそれほど簡単なことであったようには思われない。佐藤雪野はライネロヴァーの遺作である『次のときの秘密』*Das Geheimnis der nächstenMinuten*とそのチェコ語訳である『私の人生の待合室』*Čekárny mého života*を比較したうえで、「特に第二次世界大戦後のチェコスロヴァキアのエピソードに関する記述では、ドイツ語原文のほうがチェコ語訳より表現しづらそうなところも見受けられ」ると指摘している。[5)]

この指摘は、戦後のプラハの歩みを振り返ることを目的のひとつとしている『あるプラハ人の夢のカフェ』にも当てはまる。以下は、「わたし」が「夢のカフェ」の人々に終戦からビロード革命に至るまでにプラハで起こった出来事を説明していくシーンの一部である。

> 「今までのことすべてを問い直すような出来事が次々と起こっていくきっかけがあったり、それに向けての第一歩がほとんど無意識的に踏み出されたりするということはまだ全くなかったわ」わたしは向こう側に向かって説明しながら言った。「それから20年後にやってきたことは、確かに、歴史の数章を一気に飛ばしてしまうほどの激しさをもっていたけれど。」（TEP,35）

ここでは、チェコ事件以降のプラハの状況と、1989年のビロード革命に始まる変革について言及されている。年代や事件名などが明記されておらず、婉曲に語られているため、具体的に何を指しているのか分かりづらく、どことなく歯切れの悪い印象を受ける。

しかし、この部分は、チェコ語版においては表現が大きく変化している。

わたしの人生の出来事はものすごいテンポで進んでいったわ。戦後、まずわたしは悲しみを伴うものではあったけれどともかくも家に帰ることができた。その後50年代の闇があって、プラハの春の期待が沸き起こったかと思うと ── 今度はとうとう『兄弟としての』占領という悲劇が起こって、『正常化』なんて馬鹿げた呼び名の時代が続いたのよと、私は上に向かって説明しました。「そして68年の期待が潰えてから20年後にやってきた出来事は、歴史の数章をいっぺんに飛ばしてしまうくらいすごい勢いだったわ」(KNP,49)

チェコ語版では、「50年代の闇」temno padesátých let、「プラハの春の期待」naděje pražského jara、「『兄弟としての』占領という悲劇」tragédie okupace[...]„bratrské“、「『正常化』」„normalizace“、「68年の期待」naději osmšedesátého など、ドイツ語版にはなかった具体的な事象や年代が多く盛り込まれており、読者にとって理解しやすい形で表現されている。語られる年代も戦後からビロード革命まで広がり、戦後の帰郷、粛清の嵐が吹き荒れる50年代、プラハの春およびチェコ事件後の『正常化』の時代、ビロード革命などといった出来事が次々に語られていく。

こうした書き換えは、チェコ語を媒介にして経験した出来事をチェコ語で書くということの自然さ、また、共通の歴史や経験をもっているチェコの人々に向けて作品を書く際の心安さによるものであるといえる。ライネロヴァーがドイツ語を母語とみなしていたのは確かだが、ドイツ語文化のなくなった戦後プラハでの経験をドイツ語で語ることに限界を感じていたことも間違いない。

さらに、作品が収録されている本の装丁やレイアウトなどに注目すると、ライネロヴァーがドイツ語版の読者よりもチェコ語版の読者をより強く意識して作品を出版したことが推測される。

ドイツ語版は『あるプラハ人の夢のカフェ』というタイトルがつけられてはいるものの、本作を含めた7つの作品からなる短編集という形をとっており、ペーパーバックでしか出版されていない。表紙に用いられた真夜中のヴルタヴァ川の写真は、紫がかった色調に整えられ、幻想的な雰囲気が醸し出されているが、典型的なプラハ写真であるともいえる。それに対して本作とキッシュについての短編が載せられたチェコ語版『プラハの上のカフェ』は、ハードカバーで出版されている。ノスタルジーを感じさせるセピア色を基調としたブックカバーには、チェコモダン芸術の代表的な写真家ヨゼフ・エーム Josef Ehm[6)] の手になる写真が用いられている。またページを開くと、作中に登場する作家や芸術家の写真や彼らの作品に関係する資料、第一共和国時代のプラハの風景を収めた写真などがふんだんに盛り込まれており、それらすべてに詳しいキャプションが加えられているため、ドイツ語版と比べて情報量が格段に多い。ライネロヴァーはドイツ語版以上に積極的な態度でチェコ語版の出版に取り組んでいたのである。

にもかかわらず、ライネロヴァーはドイツ語作家としての意識を強く持っていた。それは、彼女が現代のプラハにおいてドイツ語で書くということに特別な意味を見出していたからであろう。そしてその意味は、彼女の作品創作の意図と強く関係していると考えられる。次節では、『あるプラハ人の夢のカフェ』執筆当時のプラハの状況を踏まえて作品を分析し、彼女が現代のプラハをどのように見ていたかを考える。

3　失われた「黄金時代」

『あるプラハ人の夢のカフェ』が出版された1996年は、ビロード革命およびチェコスロヴァキア分離後の自由化の影響が様々な面ではっきりと表れてきた時期である。そのため作中には、革命後のプラハの変容に対する

ライネロヴァーの考えが随所にあらわれている。たとえば、彼女は「夢のカフェ」の人々との会話の中で、1993年に起こったチェコスロヴァキア分離に対する見解を忍び込ませる。

> 「誰がソ連やユーゴスラヴィアやチェコスロヴァキアがなくなるなんていうびっくりするような結果を想像できたでしょう」
> 「ばかなことを言うな。どういうことだ。チェコスロヴァキアがないだって？」
> 全く世俗的な激情のうねりが、この瞬間、普段はやすらかに物思いに耽っている夢のカフェの中で感じられるようになった。（TEP,36）

チェコの現代史家イジー・スクは、チェコスロヴァキア分離に対する当時の人々の反応に関して、「共産主義体制が崩壊してから、民主的な知識人たちはチェコスロヴァキアという国家を歴史的な遺産として保持するべきだと考えていたため、チェコスロヴァキアの消滅は自由化への移行において失敗としてとりわけ強調された[7)]」と述べている。上の引用にみられる「夢のカフェ」の常連客たちの反応には、こうした当時の知識人たちの考えが色濃く反映されている。スクが言うチェコスロヴァキアという国家の「歴史的な遺産」とは、チェコスロヴァキア共和国の原型となっているマサリクの第一共和国の文化、つまり、「黄金時代」の文化を指している。第一次世界大戦後誕生した第一共和国は、チェコ民族とスロヴァキア民族にとっては最初の独立国家であり、チャペックやハシェクをはじめとするチェコ系の作家や芸術家たちがチェコ語文化の可能性を大きく押し広げていった時代でもあった。チェコ語文化の隆盛期に当たる「黄金時代」の記憶は後のチェコスロヴァキアの人々にとってはアイデンティティの源泉としてとらえられていたと考えられる。チェコスロヴァキアという国家の消滅は、自分たちのアイデンティティの源泉である第一共和国時代からの文

化的な連続性が消滅すること、つまり、現代のプラハと「黄金時代」のプラハの間に決定的な断絶が生じることを意味していた。

実際、ビロード革命後のプラハにおいて文学や芸術を取り巻く状況は大きく変容した。たとえば、語り手の「わたし」は「夢のカフェ」の常連客のひとりであるカフカに対して以下のように説明する。

> 「カフカさん、プラハでは今あなたの肖像画が売られていることにもうお気づきになりましたか？［……］売れっ子は、なんて言ったら失礼でしょうけれど、売れっ子はやっぱりあなたなんですよ。［……］」（TEP, 17-18）

ここでは、自由主義経済の導入に伴って観光地化したプラハで、カフカが一作家としてではなく、観光資源として市場経済の中に組み込まれたことがアイロニカルに表現されている。ナチスによる占領や共産党の一党独裁が続いていたため、第一共和国時代の文化はチェコスロヴァキアの人々の心の支えであり続けた。しかしそうした役割は、革命後自由化が進む中で日に日に失われていった。文学や芸術に対する関心が薄らいでゆく現代のプラハの状況に対して、ライネロヴァーは少なからず危機感を覚えていたのである。

4 「逃避先」としてのプラハ

ライネロヴァーは朗読会や展示、創作活動など様々な方法で、現代の人々にかつてのプラハ文化を伝えようとしていた。『あるプラハ人の夢のカフェ』は彼女のそうした試みを作品という形で表わしたものである。彼女はこの作品の中で、プラハで活躍した芸術家を紹介するだけでなく、第一共和国時代の文学や芸術を取り巻く状況をも伝えようと試みている。実際、「夢のカフェ」という舞台は、当時プラハに150軒以上あったといわ

れている文学カフェ[8)] の姿に基づいている。

> いったいどこに、わたしのプラハを歩き回りながら、わたしはいつも自分に問いかける。いったいどこにカフェは消えてしまったのかしら？　そこではみんな、一杯のブラックコーヒーを飲みながら[……]、半日、いやほとんど一日中、議論をしたり、計画を立てたり、多くの情報を得たり、興味深い人を観察したり、その人と知り合いになったり、友達になったり、または遂には大きな恋を見出したりしたものだったのだけれど。そんな逃避先はもうとっくの昔になくなってしまったから、わたしは今や全く個人的なプラハの夢を紡ぎだすのです。(TEP,7)

当時の芸術家や知識人の多くは日常的にカフェに通い、ヨーロッパ各地の新聞や雑誌を読んだり、他の客と文学や芸術について議論したりしていた。現実から離れてひとときの安らぎを得ることができる文学カフェを、ライネロヴァーは「逃避先」Zufluchtswinkelという言葉で言い表している。この言葉には、くつろぎの空間という意味合いを超えて、具体的な文学カフェの状況や、当時のプラハが抱えていた多民族・多言語都市特有の事情が反映されている。

以下、そうした点に注目しながら「夢のカフェ」という舞台を分析し、第一共和国時代の文化がどのようなものとして描かれているかを考察しよう。

なにより興味深いのは、さまざまな作家や芸術家が世代の差や言葉の違いにかかわらず、「夢のカフェ」というひとつの空間に同席していることである。しかもライネロヴァーは、「夢のカフェ」に座っているに違いない数多くの芸術家の中から言及すべき芸術家をよく考えて選んでいる。つまりカフェで交わされる会話の内容以上に読者に紹介されていく作家の顔

ぶれが重要なのだ。

実際、作中でライネロヴァーはドイツ系作家とチェコ系作家を意識的に同席させ、芸術や社会状況について意見を交換させている。たとえば、1963年に「カフカ会議」主催したユダヤ系の文学研究者ゴルトシュトゥケルは「夢のカフェ」では両方の民族の作家から歓迎される。

> カフカは飛び上ってわたし［ゴルトシュトゥケル］のほうにやってきたし、ヴェルフェルは、［……］椅子をすすめてくれたし、ヤロスラフ・サイフェルトとフランチシェク・ランガーは明らかにプラハの成長を喜んでいるみたいだった。みんな［……］「カフカ会議」について確かな報告を聞こうとわたしに迫るんだよ。（TEP,20）（［］内は執筆者による）

ここでは、ドイツ語作家のカフカやヴェルフェルFranz Werfelと、チェコ語作家のサイフェルトJaroslav Seifertやランガー František Lagerが、民族や言語の違いに関わらず「カフカ会議」というテーマに強くひきつけられていく様が描かれている。

19世紀以来、チェコにおけるドイツ系住民とチェコ系住民の関係は友好的なものであったとは言い難く、「チェコ人とドイツ人が接触することは、ほとんどすべての領域においてごくわずかなことに過ぎなかった[9)]」。両民族の対立関係は第一共和国成立後も根深く残っており、とりわけドイツ国境地帯に居住するズデーテン・ドイツ人[10)]の新共和国への反発は、やがてナチスによるチェコスロヴァキアの解体と併合を引き起こす原因となった。こうした対立状態にもかかわらず、ふたつの民族の作家たちは文学カフェ等での出会いをきっかけにお互いの作品を翻訳し合い、また批評し合って活発に交流していた。[11)]当時のプラハにおいて、文学カフェは不穏な民族対立から逃れて作家たちが自由に交流できる数少ない「逃避先」

だったのである。ライネロヴァーは、当時の作家たちが求めた文学を媒介とする民族間の交流関係を「夢のカフェ」で実現させ、「黄金時代」の文化的豊かさが民族対立を乗り越えようとする知識人たちの出会いそのものにあったということを、あらためて読者に想起させようとしているのである。

他方、「夢のカフェ」の常連客の中には、ブロッホErnst Brochやヘルツフェルデ Wieland Herzferdeのようにドイツやオーストリアからプラハへと亡命してきた作家や知識人も少なくない。

> 夢のカフェではかつて地上のプラハのカフェでは普通だったように、いわゆるヒトラーの第三帝国から「プラハへの」亡命者にも同じような常連客としての権利を与えている。(TEP, 32)

ドイツ国内でヒトラーが政権を掌握した1930年代、プラハはドイツやオーストリアから多くの亡命者を受け入れた。その中には反ナチズムの作家や知識人が多く含まれていたのだが、彼らは次の亡命先が決定するまでプラハにとどまり、作品を執筆したり雑誌を発行したりした。ドイツやオーストリアからの亡命作家たちにとって、プラハはまさにナチスからの「逃避先」だったのである。

ライネロヴァーはチェコ語版の中でフォグラー Jaroslav Fogler[12)]に関する記述を付け加え、「逃避先」としてのプラハの状況を亡命作家を受け入れるチェコ人の立場を通して描き出している。彼は一般的にはチェコの児童文学作家として知られているのだが、本作品においてはライネロヴァーの同僚として紹介される。

> そういうわけで、わたしはまさにこの会社で最初の仕事を得た。わたしは16歳だった。きれいな事務所のふたつ目の書き物机には、わ

たしより9歳年上の若者が座っていた。彼はヤロスラフ・フォグラーといった。(KNP,45)

ライネロヴァーが務めていたオスカー・シュタイン社firma Osker Steinは、ベルリンから亡命してきたマリク書店[13)]Malik Verlag に事務所を貸すなどして亡命作家たちの作品の出版を支援していた企業であった。チェコ人作家フォグラーは、当時、ブレヒトやヴァイスコップといったプラハの亡命作家たちの作品が出版される現場に立ち会っていたということになる。ライネロヴァーは、フォグラーと亡命作家たちの見落とされがちなつながりを指摘することで、1930年代のプラハが、国家の枠組みを超えてナチズムから言論出版の自由を守ろうとする作家たちの抵抗の場所でもあったことを証明しているのである。

5　プラハのドイツ語作家として

第一共和国時代の作家たちは、民族対立やナチズムなどの危機を肌で感じながらも、プラハというひとつの街で民族、言語、国家の壁を越えてより良い文学創作を追求していった。第一共和国時代の文化を豊かで広がりのあるものとしたのは、プラハのこうした「逃避先」としての性質にほかならない。

当時の文学芸術を取り巻く状況は、単一言語都市となった第二次世界大戦後のプラハでは失われてしまった。ライネロヴァーは、かつての多民族・多言語都市プラハにおいて活発だった言語を超えた文学や芸術の交流を目撃し、自身もまた関与し、その経験を次世代に向けて発信できる数少ない人物だったのである。彼女には、チェコ語で執筆する、もしくはドイツへ移住して執筆するという選択肢もあったはずである。しかし彼女が選びとったのは、プラハにとどまってドイツ語で執筆するという、より困難

な道だった。彼女のこの選択には、プラハのドイツ語作家として、つまり第一共和国時代の作家の生き残りとして、当時の文化状況を現代のチェコの人々に身をもって伝えていかねばならないという強い使命感が表れている。

『あるプラハ人の夢のカフェ』というタイトルからも明らかなように、ライネロヴァーは自身のアイデンティティをプラハという都市に帰属させている。その強い愛着は、第一共和国時代のプラハに向けられているのと同様、現代のプラハに対しても向けられていた。ライネロヴァーは、作品を残すだけでなく、プラハに住みながらドイツ語で書く、あるいは語るという行為を具体的に示すことによって、「黄金時代」のプラハと現代のプラハとのあいだに橋をかけようとしたのである。

使用テクスト及び省略記号

Lenka Reinerová:Das Traumcafé einer Pragerin.Berlin.2008.

Lenka Reinerová:Kavárna nad Prahou.Praha.2010.

本文の引用ではDas Traumcafé einer PragerinをTEPと、Kavárna nad PrahouをKNPと示し、ページ数を記している。

注

1）ライネロヴァーはチェコ最後のドイツ語作家と呼ばれている。Vgl. Novinky.cz: Zemřela poslední německy psící česká autorka Lenka Reinerová. http://www.novinky.cz/kultura/143625-zemrela-posledni-nemecky-pisici-ceska-autorka-lenka-reinerova.html
最終閲覧日2013年9月5日。

2）Salmhofer, Gudrun: *Was einst gewesen ist, bleiben in uns. -Erinnerung und Identität im erzählerischen Werk Lenka Reinerova-*. StudienVerlag. Wien. 2009と佐藤雪野『<作家紹介>レンカ・ライネロヴァーの経歴と作品』、「東北ドイツ文学研究」第50号、東北ドイツ文学会、2007年、参照。

3）ila-Lateinamerica-Politik, Wirtschaft, Kultur und sociales Engagement: Ich habe es trotzdem überlebt.
http://www.ila-web.de/lebenswege/schicksalreinerova.html
最終閲覧日2012年9月5日。

4）ライネロヴァーは、ドイツ語は家庭の言語であったと述べている。Vgl. Radio Praha: Lenka Reinerová -a writer who keeps the rich tradition of Prague German literature alive.
http://www.radio.cz/en/section/books/lenka-reinerova-a-writer-who-keeps-the-rich-tradition-of-prague-german-literature-alive
最終閲覧日9月5日

5）佐藤雪野『レンカ・ライネロヴァーの最後のメッセージ ── 最後の作品のドイツ語版・チェコ語版の比較 ── 』、「東北ドイツ文学研究」第53号、東北ドイツ文学会、2010年、34頁参照。

6）チェコの新即物主義芸術を代表する写真家。（1909-1989）

7）Suk, Jiří: *Czechoslovakia's Return to Democracy*. In: Pánek, Jaroslav. Tůma, Oldřich. et alii. Trans Quinn, Justin. Key, Petra.Bennis, Lea: *A History of the Czech lands*. Karolinum Press. Praha. 2009.P615

8）Binder, Hartmut: *Wo Kafka und seine Freunde zu Gast waren- Prager Kaffehäuser und Vergnügungsstätten in historischen Bilddokumenten-*. Vitalis. Praha.2000.

9）ティーレ＝ドールマン、クラウス『ヨーロッパのカフェ文化』、平田達治・友田和秀訳、大修館書店2000年、225頁参照。

10）ズデーテン地方には古くからドイツ系住民が多く居住していた。

11）ブロートがドイツ、チェコ、ユダヤの文化、文学の仲介者として活躍していたことはよく知られているし（Vgl. 武林多寿子『仲介者としてのマックス・ブロート ── 異文化のはざまで ── 』、『独文学報』第11号、大阪大学ドイツ文学会、1995年。）、カフカの恋人ミレナ・イェセンスカー Milena Jesenská はカフカ作品をチェコ語に翻訳していた。またオットー・ピック Otto Pick やルドルフ・フッフス Rudorf Fuchs、パヴェル・アイスネル Pavel Eisner など、両方の言語に通じていた作家たちも、盛んに両言語の作品の翻訳を手がけた。

12）チェコの児童文学者、教育者。（1907-1999）

13）ヘルツフェルデによって開かれた出版社。1933年から1936年までプラハでブレヒト選集やヴァイスコップの『労働者画報』などを出版した。

（大学院博士前期課程学生）

RESÜMEE

Auf der Suche nach der ‚Goldenen Zeit' „Das Traumcafé einer Pragerin" von Lenka Reinerová und ihre Sprachwahl

Junko SHIMADA

Prag war ursprünglich eine vielsprachige Stadt, aber nach dem Zweiten Weltkrieg wurde sie eine einsprachig tschechischsprachige Stadt. Die Prager Schriftstellerin Lenka Reinerová (1916-2008) war von Geburt an zweisprachig, ihre literarischen Werke schrieb sie auf Deutsch. Diese Abhandlung soll den Grund ihrer Sprachwahl untersuchen.

Reinerová betrachtete zwar Deutsch als ihre Muttersprache, aber es sieht so aus, dass sie suf Deutsch mehr Schwierigkeiten hatte, über einige Ereignisse zu schreiben, als auf Tschechisch. Bei ihrer Sprachwahl geht es jedoch nicht darum, welche Sprache einfacher für sie war, sondern darum, was sie durch ihr Werk sagen möchte.

„Das Traumcafé einer Pragerin" erschien 1996, als Prag von der Liberarisierung nach der Samtrevolution viel gewandelt wurde. Während der Nazi-Okkupation und der Zeit des Kommunismus betrachteten die Leute in der Tschechoslowakei die Kultur aus der Zeit der Ersten Republik, der ‚Goldenen Zeit', als die Quelle ihrer Nationalidentität. Heute ist diese Zeit in Vergessenheit geraten. Das betrachtete Reinerová als ein Problem.

In ihrem Werk versucht sie, die Atmosphäre der Ersten Republik wiederaufscheinen zu lassen. Sie schuf die Bühne, das ‚Traumcafé', auf Grundlage der Literaturcafés, die während der Ersten Republik für Schriftsteller in Prag als ‚Zufluchtswinkel' dienten. Im ‚Traumcafé' sitzen tschechische Schriftsteller, Prager deutschsprachige Schriftsteller und Exilschriftsteller aus dem Dritten Reich beieinander. Damit deutet sie an, dass damals viele Schriftsteller die Grenzen des Volks, der Sprache und der Nation überwanden, um trotz dieser Gegensätze und der Drohung der Nazis gemeinsam eine reiche Kultur zu schaffen.

Reinerová betrachtete es als ihre Aufgabe, den Leuten im

gegenwärtigen Prag von der lebendigen Kultur der Ersten Republik zu erzählen, die aus der vielethnischen und vielsprachigen Stadt geboren wurde. Sie schrieb weiterhin auf Deutsch, weil sie sich als Überlebende der Schriftsteller des vielkulturellen Prag empfand.